

< 目次 >

1. 事務局より
2. 編集委員会より
3. 前年度編集責任者より
4. 新編集委員より
5. 本年度編集責任者より
6. 運営担当より
7. 例会予定
8. 談話会予定
9. 各地の研究会だより
10. 海外情報
11. メーリングリスト Frenchling からのお知らせ
12. 2017 年度収支決算報告
13. 編集後記

1. 事務局より

事務局が早稲田大学に移って四年目（最終年度）を迎えました。事務局業務は酒井（早稲田大学）と守田（京都大学）で分担しています。連絡先は次のとおりです。

〒162-8644 東京都新宿区戸山 1-24-1

早稲田大学文学学術院 酒井智宏研究室内 日本フランス語学会事務局

belf-bureau@list.waseda.jp

◆会費

会費の徴収は郵便振替で行っています。『フランス語学研究』に同封する振込用紙をご使用ください。3年以上会費の納入が滞っている場合は会員資格が停止され、『フランス語学研究』は送付されなくなりますのでご注意ください。最新号の『フランス語学研究』第52号は2015年度以降に会費を納入された方にお送りしています。

◆投稿規程の変更

従来『フランス語学研究』への投稿は11月末日までに原稿を事務局宛に郵送することとなっていました

が、第51号から事務局にメールで投稿するように変更されました。今年11月末締切の第53号につきましても、郵送や編集委員による持ち込みは受けつけられませんのでご注意ください。詳細につきましては第51号以降に記載されている投稿規程をご参照ください。

◆機関誌バックナンバーのアーカイブ化について

2018年4月現在、創刊号から48号までがJ-STAGEで公開されました。

J-STAGE <https://www.jstage.jst.go.jp/>

フランス語学研究巻号一覧

<https://www.jstage.jst.go.jp/browse/belf/list/-char/ja>

今後も、刊行後3年を経過した号から順次、J-STAGEにて無料公開していきますので、会員のみなさまにおかれましては、バックナンバーとしてご活用頂けたら幸いです。

(酒井智宏・守田貴弘)

2. 編集委員会より

編集委員会より以下の4つのお知らせがあります。

◆年間テーマについて

編集委員会では、昨年度より、昨今の人文系の学問を取り巻く厳しい環境の中で、どのようにして本学会の活動を維持し、活性化するかを考えてきました。そして、このためには学会誌の内容を多様化し、より多くの研究者が投稿でき、より多くの研究者にとって有用な情報を提供できるようにすることが必要と考え、その方策として、多くの学会員の方に興味を持っていただけるような、学会の年間テーマを掲げることになりました。

2018年度のテーマは、「フランス語の多様性」です。今後7月に、昨年度に引き続きこのテーマに関連した談話会を開催し、学会誌においてもこのテーマで特集を組むこともあわせて決定しました。詳しくは下のお知らせをご参照ください。

◆『フランス語学研究』第 53 号特集論文募集：テーマ「フランス語の多様性」

日本フランス語学会では、「フランス語の多様性」を 2018 年度の年間テーマとします。それに合わせて『フランス語学研究』第 53 号 (2019 年 6 月刊行予定) では、本テーマの特集論文を募集します。フランス語と言っても、地理的変異や社会的変異などさまざまな変異があり、一様ではありません。このようなフランス語の多様なあり方に光を当てる優れた論文が投稿されることを期待しています。原稿提出締切は 2018 年 11 月末日必着で、投稿方法は従来通りですが、投稿の際に「表紙ファイル」で「形式」を「特集論文」としてください。なお、それ以外のテーマの論文も従来通り募集していますので、こちらも奮ってご投稿ください。

◆日本フランス語学会の公式メーリングリスト

昨年、Frenchling 管理グループと日本フランス語学会編集委員会との協議の結果、Frenchling を日本フランス語学会の公式メーリングリストとして位置づけることを決定いたしました (詳細は 11 にて)。

この決定に伴いまして、日本フランス語学会の会員向けの案内等が Frenchling に配信されています。Frenchling に登録していない会員の方は、できるだけ登録していただくようお願いいたします。登録するには、以下の項目をメールに書いて、管理グループアドレス g-frenchlingowners@googlegroups.com に送って下さい。

- (1) 登録用アドレス
- (2) 氏名
- (3) 所属
- (4) 登録を希望する理由 (日本フランス語学会会員である場合には、その旨お書き頂ければ結構です)

◆『フランス語学研究』投稿規程改訂のお知らせ

編集委員会では、協議の結果、投稿規程を一部改訂しました。改訂の内容は、論文が共著の場合の扱いと、研究ノートの制限枚数に関わるものです。共著の扱いについては第 1 条と第 9 条に括弧書きで加筆を行いました。過去 10 年ほど投稿がない研究ノートについても、執筆を容易にし、投稿を促進するために、制限枚数を 7 枚から 10 枚に増やし、その内容を第 3 条に反

映させました。詳しくは、『フランス語学研究』表紙裏の「投稿規程」及び巻末の「投稿原稿のジャンルについて」をご覧ください。

(日本フランス語学会編集委員会)

3. 前年度編集責任者より

ニューズレターとともに『フランス語学研究』第 52 号が皆様のお手元に届いているものと思います。この原稿を書いている時点では、再校ゲラを、校正上の見落としが多々残っていたことに冷や汗をかきつつ、印刷所に戻したところなのですが、最終版ではミスがなくなっていることを祈ります。

編集の過程ではもっと大きなミスも犯しましたが、会員の皆様のご理解と編集委員のサポートのおかげで、とりあえず任期を全うすることができそうです。不手際を深くお詫びすると同時に、ご協力に心からお礼を申し上げます。

昨年度のニューズレターで、編集責任としての自分の役割は、平塚前編集責任が定めた方向を具体化し、次に引き継ぐことだというようなことを書きました。実際、2015 年度のリプライシートの導入、2016 年度の年間テーマの設定のような、新たな取り組みを 2017 年度には行うことができませんでした。特集号編集の具体的な実施も、2018 年度の伊東新編集責任に委ねることになります。要するにこの一年間で自分がしたことといえば、渡されたバトンを落としそうになりながら、また転びそうになりながら、なんとか中継地点まで辿りつき、バトンを次に渡すことだけでした。

そうした 1 年間の活動の中で、この欄で書きとめておきたいことが 2 点あります。

1 点目は、52 号掲載の「誌上シンポジウム」のことです。これは、従来の同種の企画と異なり、編集委員がテーマを決めてお膳立てをしたものではなく、自発的になされた問いかけがきっかけとなって実現したものです。それも当初、応答者はお一人から始まったのですが、徐々に議論の参加者が増え、最終的には近年にはない規模の充実した企画となりました。お忙しい中、貴重な時間を割いて議論に加わってくださった執筆者の皆様に、お礼を申し上げます。また今後も、学会員の問いかけに対し、その問題に造詣の深い学会員が応答し議論を深めるといった形の企画が増えていくことも期待します。

2 点目は「研究ノート」の制限枚数を 7 枚から 10 枚

に増やしたことです。これについても自分のアイデアではなく、編集委員会の席上、長期にわたって掲載のないこのジャンルの投稿を促すことを狙って提案があり、審議の結果、決定されました。「研究ノート」は、「萌芽的研究で今後の展開が期待できるもの」と位置づけられています。興味深いアイデアをお持ちの若手研究者の方々には、まずは「研究ノート」に投稿して考えを練り上げた上で、その考えを裏付けるより多くの論拠とデータを伴った原稿を「論文」カテゴリーに投稿する、といったプロセスを踏むことも考えていただければと思います。

(金子 真)

4. 新編集委員より

◆木島愛（千葉工業大学）

大学院に進学すると、毎月フランス語学会の例会と勉強会（当時は同日開催ではなく、隔週の土曜日に交互開催）に出席するというのが、在籍していた筑波大学での基本方針でした。学部生だった頃、月に2回「学会と勉強会で東京へ行く」のは、研究者の仲間として認められるような、羨ましい感覚を抱いていたことを思い出します。実際に、院生になってからは、フランスに留学するまで、可能な限り、例会と勉強会に参加させていただき、多くのことを学びました。また、そこで当時院生同士として出会った方々が、現在ご活躍されている姿を見ると、例会や勉強会で学ぶこと、得るものが如何に重要なのかを認識できます。私にとって、このような以前から馴染み深い勉強の場である日本フランス語学会の編集員をこの度拝命したことは、大きな喜びであると同時に、今後は多くのことをこの学会を通じてアウトプットしていかなければならないという責任の重さを感じております。

これまで主に知覚動詞の意味的統辞的研究を行い、日仏双方において博士論文を書くことができました。最近、それまで例外としてきた「凝結表現」の分析に着手しています。このテーマによる最初の論文として採用いただけたのも研究促進プログラムとして参加した『パロールの言語学』でした。これまでとは異なる理論や観点から分析を行うことで不安も多い中、この研究促進プログラムではお互いに意見を述べることで、多くのことを学ぶことができ、とてもよい経験となりました。今後は、編集委員として微力ながら頑張りたいと思っております。

5. 本年度編集責任者より

BELF53号の編集責任をつとめることになりました。一昨年度平塚編集責任のもと「フランス語の多様性」という年間テーマが掲げられましたが、複数年にまたがる課題として昨年に続き今年もその精神を引き継いで行くこととなります。個人的にも昨年の夏頃急遽企画されたソーシャルのテキストをめぐる「誌上シンポジウム」に参加でき、フランス語の多様性について多くのことを学びました（BELF52号掲載）。またシンポジウム委員として企画に関わることとなった2018年6月のシンポジウムでは、Sarah de Vogué氏（パリ・ナンテール大学）と Gabriel Bergounioux氏（オルレアン大学）をお招きして理論と実践の両面からフランス語のヴァリエーションの問題を議論できることになりました。BELF53号には「フランス語の多様性」というテーマがより強く反映されることになると思います。本誌では社会言語学に関する論文はあまり掲載されていないようですが、生のフランス語に触れる機会の多い今の学生さんたちには関心の高い分野のようです。フランス語の方言や海外のフランス語などもフランコフォニーへの関心が高まって以来興味を持つ方も多いですが、なかなか論文執筆までは行かないようです。このような分野にも開かれた学会誌であることがBELFの今後にも重要となると思いますが、まずはシンポジウムや談話会での啓蒙活動が重要であると思います。

学会の運営に関しても金子前編集責任からの引き継ぎになります。編集委員の方々と、学会の運営に関わる会議を持てるのが理想ですが、実質的に学会誌の編集委員会と学会の運営会議が同一化されている現状からすると、議論する時間が十分取れず、様々な議題が先送りにされることがままあるようです。むりをせず、昨今の大学の現状も踏まえた学会の運営を提案していきたいと思います。このあたりは編集責任だけでは変えられるものではなく、編集委員ならびに学会員の皆様方のお力を借りながら、適切に運営し、次の編集責任の方に引き継いでいければと思います。50年以上紙媒体で続いていること自体奇跡というよりほかない雑誌をより長く存続させるため、皆様のお力添えを切に望みます。

(伊藤達也)

6. 運営担当より

例会の発表者が決まらないという事態はここ数年、ほとんど常態化していた。しかし、それなりに若手に声をかければ枠は埋まるという状態が続いてもいた。本来は運営側が声をかけて発表者を掘り起こすというのはおかしい話なのだが（2014年度の渡邊淳也氏によるニューズレター「編集後記」を参照）、今年ちょっと状況が違う。おそらく該当者を抱えている教員は発表者の発掘に力を使い、さらに **Frenchling** で呼びかけてもいる。それでも決まらないのは、なかなか危機的な状況なのかもしれない。

いったい何が起きているのだろうか。第二外国語としてフランス語を選ぶ学生が急激に減ったわけでもなければ、言語学という学問にまったく人気がなく、各大学の専門科目や全学共通科目から消えていっている、という話も聞かない。確かに大学院進学希望者は急カーブを描いて減ってはいるが、個人的な印象でも、フランス語を選択する学生はそれなりにいるし、フランス語の分からない学生を前提とした言語学の授業も、それなりに履修者はいる。しかし、どうも言語学そのものとフランス語の研究は交わらないように見えるのである。なぜ交わらないのだろうか。どうせ言語学をやるなら理論研究にして、記述的に研究するならフランス語のようなメジャーな言語はよさうという理由なのかもしれない。もちろん真相は分からないのだが、言語学そのものや理論的な研究にそれなりの人気があるのであれば、フランス語学と一般的な言語学の間にはどうも大きな溝があるのではないかと、という疑惑も生じてしまう。個人的には、フランス語学は言語学の一部門で、言語学の中でも1つの言語に特化した分野の名に過ぎないと思っていたし、今もそう思っているのだが、世間的な認識は違うのかもしれない。

さて、例会の発表者が決まらないが、これとって打つ手がないという問題について、潜在的な枠が広がるようにするというのはいさかしの案かもしれないと思う。言語学をやっているならば、フランス語学ではないけれどフランス語はできる、フランス語を使って研究をしているという人に出会うことは、まあある。フランス語もできてバスク語の研究をしている、フランス語を通してマダガスカルの研究をしている、といった人たちである。また、フランス語のことはほとんど知らないけれど、理論研究のデータとしてフランス語の何らかの

現象を扱っているという人もいる。そういう人たちの研究をフランス語学の一部として受け入れることはできないだろうか。「別の学会で発表してもらえばいい」といった声が聞こえてきそうでもあるが、フランス語についても何かしら語ってくれるのであれば、フランス語学とも言えそうだからである。

悲観的と言われるかもしれないが、今後は学会の活動規模を縮小していくことが避けられなくなるのかもしれない。それでも学会として生き残っていくためには、細々とでもこれまでの活動を継続していくこと、活動できるメンバーが精力的に活動すること、そしてこれらに加えて、異物と思われるものも受け入れつつ、自らが変化していくことも大事なのだろうと思う。進化の観点から考えるなら、ある種が生き残ることができたのであれば、ある時の選択、ある時の変化が結果的に適応だったということになる。たぶん学会も同じである。何が正しいのかは、生き残りに成功するか失敗するという結果が出るまでは分からないのだから、今いる人たちで精一杯じたばたするしかなさそうである。

(守田貴弘)

7. 例会予定

日本フランス語学会では、毎年4月から12月まで（7月と8月を除く）月一回、原則として土曜日15:00-18:00に例会を開いています、一回の例会では通常二人の方が研究発表を行います。

例会案内はホームページによる他、メーリングリスト **Frenchling** でも配信しています。

例会はフランス語学会の会員以外の方でも、自由に来聴することができます。入場も無料です。みなさまのご参加をお待ちしております。

会場: 早稲田大学文学学術院 (戸山キャンパス)

アクセス:

地下鉄東京メトロ 東西線 早稲田駅 徒歩3分

副都心線 西早稲田駅 徒歩12分

JR山手線/西武新宿線 高田馬場駅 徒歩20分

発表のご希望やその他例会に関するお問い合わせ:

酒井智宏 (例会運営担当/早稲田大学文学学術院)

t:sakai@waseda.jp

<p>以下はニューズレター編集段階の4月30日現在の予定です。最新の予定は学会ホームページで確認してください。</p> <p>第320回例会 2018年5月19日(土) 15:00-18:00 会場：早稲田大学文学学術院（戸山キャンパス）39号館5階第5会議室 (1) 井上 大輔（上智大学大学院） 「Crois-tu que P?とPenses-tu que P?における叙法選択とその要因」 (2) 発表者未定 司会：守田 貴弘（京都大学）</p> <p>第321回例会 2018年6月16日(土) 15:00-18:00 会場：早稲田大学文学学術院（戸山キャンパス）33号館16階第10会議室 (1) 牧 彩花（東北大学大学院） 「フランス語の人称転換——二・三人称詞から«je»・«on»へ——」 (2) 発表者未定 司会：酒井 智宏（早稲田大学）</p> <p>第322回例会 2018年9月29日(土) 15:00-18:00 会場：早稲田大学文学学術院（戸山キャンパス）33号館16階第10会議室 (1) 佐々木 香理（関西学院大学非常勤） 「接頭辞 RE の本質的機能——RE と à / de nouveau の比較対照——」 (2) 発表者未定 司会：守田 貴弘（京都大学）</p> <p>第323回例会 2018年10月20日(土) 15:00-18:00 会場：早稲田大学文学学術院（戸山キャンパス）39号館6階第7会議室 (1) 発表者未定 (2) 発表者未定 司会：酒井 智宏（早稲田大学）</p> <p>第324回例会 2018年11月10日(土) 15:00-18:00 会場：早稲田大学文学学術院（戸山キャンパス） (1) 発表者未定 (2) 発表者未定 司会：守田 貴弘（京都大学）</p>	<p>第325回例会 2018年12月8日(土) 15:00-18:00 会場：早稲田大学文学学術院（戸山キャンパス） (1) 発表者未定 (2) 発表者未定 司会：酒井 智宏（早稲田大学）</p> <hr/> <p>8. 談話会予定 以下の通り、フランス語談話会を開催致します。今年度は、アフリカやカナダの多言語併用の問題や少数言語の問題についてパネルディスカッションを行います。皆さま奮ってご参加ください。</p> <p>日時：7月28日（土）15時～18時 場所：早稲田大学文学学術院（戸山キャンパス）39号館5階第5会議室 テーマ：「フランス語の多様性」</p> <p>パネラー（五十音順）：梶茂樹（京都産業大学） 佐野直子（名古屋市立大学） 矢頭典枝（神田外語大学） 世話役：田原いずみ・秋廣尚恵 (秋廣尚恵)</p> <hr/> <p>9. 各地の研究会だより ◆関西フランス語研究会 関西の大学院生と教員が中心になって研究会を開いています。会場は原則的には関西大学ですが、大阪なんばにある大阪府立大学のサテライト I-site で行うこともあります。昨年は残念ながら、3件しか発表がありませんでした。皆さんの積極的な参加を待っています。</p> <p>4月15日： 武本雅嗣 「二次叙述構造をなす前置詞 en の用法について」</p> <p>10月14日： 佐々木香理 「接頭辞 RE の機能—主体移動動詞の場合」</p> <p>1月27日： 梶原久梨子 「アスペクト動詞につづく à Inf.と de Inf.の使い分け-continuer の場合-」</p>
---	--

この研究会では、論文や学会発表をひかえる人がその準備のために発表したり、論文を完成したり学会発表を終えた人がその内容を紹介したりしています。形式にこだわらず、気軽に意見・情報の交換ができる集まりです。また、新刊書や論文の紹介、国内外の新しい研究の動向についての紹介や解説なども歓迎します。

発表を希望される方は世話人の平塚か大久保までご連絡ください。案内はメーリングリスト Frenchlingで行っています。

平塚徹 : hiratuka@cc.kyoto-su.ac.jp

大久保朝憲 : tomonori@ipcku.kansai-u.ac.jp

(平塚徹)

◆東京フランス語学研究会

東京フランス語学研究会は、大学院生など、若手を中心としたフランス語学研究者の気楽な研究発表、議論、交流の場です。多くのかたがたに参会していただきやすいよう、フランス語学会の例会がひらかれる日に、同じ（または近接した）会場で、原則として13時から14時30分まで開催します。フランス語学会の例会の会場が変更されるときや、編集委員会などと重なるときは開催せず、年間6回程度の実施を目安とします。

会員資格、発表資格、会費などの制度は設けませんので、関心のあるかたはどなたでも自由に参会、発表していただけます。発表は、フランス語（学）に関係することであれば、どのようなテーマでもかまいません。また、完成された内容である必要もありません。学会発表の前段階にあたるような習作的な発表や、先行研究に対する論評といった形の発表も歓迎します。

4月末現在、今後の研究会の予定は、つぎのようになっております。

第38回研究会

日時： 2018年5月19日(土) 13時から14時30分
会場： 早稲田大学文学学術院（戸山キャンパス）39号館5階第5会議室

#いつもの会議室と異なります。ご注意ください。

発表者： 比内晃介（筑波大学大学院）

第39回研究会

日時： 2018年6月18日(土) 13時から14時30分
会場： 早稲田大学文学学術院（戸山キャンパス）33号館16階第10会議室

発表者： 未定

第40回研究会

日時： 2018年9月29日(土) 13時から14時30分
会場： 早稲田大学文学学術院（戸山キャンパス）33号館16階第10会議室

発表者： 鈴木拓真（東京外国語大学大学院）

第41回研究会

日時： 2018年10月20日(土) 13時から14時30分
会場： 早稲田大学文学学術院（戸山キャンパス）

発表者： 中川 亮（東京大学大学院）

第42回研究会

日時： 2018年11月10日(土) 13時から14時30分
会場： 早稲田大学文学学術院（戸山キャンパス）

発表者： 未定

発表を希望なさるかたは、下記ホームページの「お問い合わせ」の項目から世話人あてにご連絡ください。最新の予定については、ホームページの「今年度の研究会」の項目でご確認ください。

東京フランス語学研究会ホームページ：

<http://lftky.jimdo.com/>

(渡邊淳也・塩田明子)

10. 海外情報

今号はErasmus+の枠組みで2・3月の2週間にわたり、ブザンソンのフランシュ＝コンテ大学に招聘されて授業を行った木田の経験談をご紹介します。

◆フランシュ＝コンテ大学言語人間社会科学学部

(Université de Franche-Comté, UFR Sciences du langage, de l'homme et de la société)

Erasmus+はErasmusやErasmus Mundusを引き継ぐEUの高等教育支援プログラムで、学生・教職員の派遣・受入が含まれる。私はこの協定の枠組みで、所属大学からフランシュ＝コンテ大学に教員として派遣されて、2週間ほど滞在することになった。

契約書には「16時間の授業をすること」とある。以前、同じ大学から連続講演に招聘された際に、「日本文化について」という紐付きの招待だったため、テーマ選びに苦労した記憶がある（その時は俳句と落語と陰影空間について話した）。今回は言語学の学生向けなので、自分の本の内容でも話せば16時間くらいは軽くこなせるかなと高をくくっていたところ、既存の科目内の授業で講義をしなければならぬことが判明する。そのうち担当する科目名リストが送られてくるのではないか。言語学学科ヨロズ屋状態で、下は学士L1から上は修士M1/2に至るまで、概論、意味論、音声学から言語政策の授業まで並んでいる。

しかたないので、科目名からこの時期に扱う内容を自分のフランス学部時代の経験から想像して準備しようとしていたところ、協定コーディネーターと称する女性から希望する内容を記したメールが届く。しかし、自分が話せるものとはほど遠いので、メールによる数回のやり取りで内容を詰めていった。結局、以下のような内容に落ち着いた。「Étudier le sens」(L1)

ではジェスチャー意味論、「Corpus & Langue(s)」(M1)ではマルチモーダルコーパス、「Diversité linguistique」(L1)では形態統語論の置換分析による日本語構造分析とアフリカにおける言語寡占現象(2回分)、「Politique linguistique」(FLE・M1/2)では日本のフランス語学習者と外国語教育、「Phonétique, Phonologie, Remédiation」(FLE・L3)では日本の言語景観にみる音韻変化考現学と学習モチベーション理論(2回分)、「Langue française」(L1)ではフランス語の既読文献の紹介とフランス語と自分の経歴(2回分)。最後のあたりはもうネタ切れ状態である。ご周知の通り、フランスの授業1回は2時間なので、準備しておかないと話しが到底もたない。しかし、あたかも学会で8回の基調講演を準備するような分量である。これまで1つの学会で4つの発表が最高記録だが、今回はこの倍だ。残された時間(現地到着に先立ち、ドイツとボルドーの高校へ赴いて大学広報活動をしていたので、正味1週間ほど)で担当科目の半分くらいは授業ファイルを作った(残りは滞在中徹夜で)。滞在初日から授業だ。

経験上、L1の受講者数は150名以上(普通は階段式大教室での授業)、L3は50名前後、M1はせいぜい20名だろうと推測していたが、実際は予想より若干少ない程度だった。とはいえ、日本の大学では言語学の

授業にこれだけの学生が集まることはまずない。相手にとって不足なしと腹をくくり、一部は持ち前のハッタリと度胸でしゃべりまくった。また一部はいま流行りのアクティブラーニング(とはいえフランスではごく普通の授業形態)で準備したお題について学生と議論を展開する授業をした。個人的に、学生たちは思ったより大人しいと感じた(比較対象の自分の経験が南仏だからか、それとも時代の変化か)が、まあ日本の学生よりはノリがいい。発言機会を与えると、往々にして気の利いた反応があった。万事恙なき状況にあるので、後半はゆっくりできるだろうと安心していると、1週間目の佳境にさしかかった頃、どんなテーマでもいいから翌週に公開講演をしてくれと要請するメールが届く。頼まれると嫌と言えない性格が災いして、これも徹夜で準備することになり、思いつきでグローバル時代における言語学の多様な貢献方法という題目で、自分の研究活動全体について話した。

こうして曲がりなりにも怒濤のフランス授業滞在を無事に終えることができた。しかし、よくよく考えて見ると、フランスでは以前まで講義を拝聴する側にいたのに、フランスの学生相手に初めて教壇に立つ自分がいた。学会参加やゼミ発表とはまったく異なる、実に感慨深い経験だったと思う。機会があれば是非参加をお勧めするプログラムである。念のため申し上げておくと、謝金は一銭もでないことを付記する。

(木田 剛)

1.1. メーリングリスト Frenchling からのお知らせ

Frenchling はフランス語学関係の情報交換を目的としたメーリングリストです。1996年3月の立ち上げ以来、20年以上の長きにわたって大阪大学言語文化研究科のフランス語関係の教員有志が運営に当たってきましたが、2017年6月に日本フランス語学会の公式メーリングリストとなりました。これまでどおり、フランス語学関係の研究会や講演会といった催事の告知、文献の探索、あるいはフランス語そのものについての質問、疑問、そして議論に活用して頂くほか、フランス語学会の公式行事の案内なども配信されるようになりました。公式メーリングリスト化に伴い、これまでもまして、特定の政治的メッセージを含むもの、営利的な活動、アルバイト募集等の研究・教育と関係のないアナウンスなどはくれぐれもご遠慮いただけますようお願いいたします。なお、フランス語

関係の教員の募集に関する情報は流していただいて全く問題ありません。設立当初はフランス語に関する議論がこのメーリングリストで盛んに行われたものですが、最近はそのようなことも少なくなったのが残念です。フランス語の研究や教育に従事している我々は、フランス語に関して日々新しい発見や疑問を持つことも多いかと思いますが、そのような発見や疑問を共有するためにもこのメーリングリストを利用していただければと思います。

Frenchling は Google グループサービスを利用して運営しています。新規の登録、アドレス変更、あるいは退会の場合は直接、以下の管理グループアドレスまでご連絡ください。メンバー以外の方に登録を勧められる場合も、同じアドレスをお伝えください。

Frenchling 管理グループアドレス：
g-frenchlingowners@googlegroups.com.
 (Frenchling 担当委員)

12. 2017 年度収支決算報告 (*)

	(単位 円)
収入の部	
会費	702,000
機関誌売上金	91,000
広告収入	78,000
預金利息	359
学会経費補助 (早稲田大学)	50,000
小計	921,539
前年度繰越金	2,949,963
計	3,871,322
支出の部	
BELF51 号印刷代金(本冊および別冊)	540,421
BELF52 号編集実費	100,000
ニューズレター印刷代金	18,252
発送費・通信費	48,729
特別発表(講演)謝金	148,850
会場費	0
事務消耗品費	18,781
振込手数料	18,016
ホームページ管理費	7,642
言語系学会連合会費	10,000
小計	910,691
次年度繰越金	2,960,631
計	3,871,322

次年度繰越金の内訳は以下のとおり

銀行預金 (三井住友銀行普通預金)	821,489
(三井住友銀行定期預金)	2,007,436
郵便貯金 (普通)	38,884
(振替)	84,054
現金	8,768
計	2,960,631

(*) 2018 年 3 月 31 日現在の収支決算報告。6 月に開催される編集委員会では会計報告と監査報告がなされ、審議のうえ承認の手続きがとられる。

〒 162-8644

東京都新宿区戸山 1-24-1

早稲田大学文学学術院 酒井智宏研究室内

日本フランス語学会

13. 編集後記

本年度から初めて編集を担当したニューズレターを無事に発行の運びとなりました。原稿をお寄せくださった方々ならびに関係者のみなさまにこの場を借りてお礼を申し上げます。

最近、いろいろなところから声がかかるようになりましたが、大半はあまり知らない研究領域なので、いつも新たな発見があります。研究は広範な正しい学術知識に基づいて、新たなテーマを見つけ出し、未知の分野を切り拓くものだと、フランスで教わったことを思い出し、研究者には創造力や開拓力などの学習能力が常に問われる生涯学習だと感じています。実は建築デザインも同じで、プロジェクト毎に敷地条件やクライアントが変わるので、いつもゼロからの出発、やはり創造力、開拓力、基礎知識に頼らざるをえません。

しからば近年の学融合プログラムやグローバル人材育成は正道を歩んでいるように思われますが、個人的には「広範な正しい学術知識」という学習項目がすっぱり抜け落ちているような気がしています。この傾向はフランスも同様だそうで、現地の教員が現状を嘆いていました。翻って日本における専門教育はどうでしょうか。自問しています。

(木田 剛)

♪ ニューズレターのバックナンバーは、日本フランス語学会のホームページで読むことができます。

<http://www.sjlf.org/>